



この東京都内唯一の都立大学の素朴な校門を見て、日本人の控え目な伝統に思いを馳せる

後の中国民俗学の展望を討論しました。博学で謙虚な周先生との面談を通じて、これまでバラバラだった私の民俗学の知識が整理され、はたと合点がいった感じがしました。また、学者たちによる伝説の研究は長年にわたって主に本質主義の立場に立っていることがわかりました。

10月12日はサプライズの日です。午後1時に、程さんに誘われて口承資料研究の授業に出席しました。口承文芸研究の大先生が講義してくださると聞いていましたが、その先生がまさか常光徹教授とは思わなかったです。程さんに常光先生を紹介してもらった後、先生は私のためにわざわざ日本民間説話について話してくださいました。私は『日本民間文学概論』や関敬吾などの学者たちの論文からそのあらましを知っていましたが、常光徹先生の説明を通じて、昔話・伝説・世間話・神話の区別がはっきりとわかるようになりました。先生は私に中

と教えてくださいました。

10月7日、程さんに同行していただいて愛知大学の周星教授を訪れました。この日、周星教授はずっと私たちと一緒にいてくださり、中国民俗学と民間文学研究発展の歩み、代表学者の研究貢献及び今

国民間文学の分類を聞いて、「分類には絶対的な基準がなく、本国の民間文学の実際状況をもとに具体的に分析すべく、他国の分類方法は参考用のものである」と丁寧に教えてくださいました。

先生方のご指導と程さんのア

ドバイスのおかげで、私は20世紀中国民間伝説研究史の発展をより一層明確に整理することができて、各時期の特徴も明らかになり、結論にも少し自信を持てるようになりました。10月13日の第148回比較民俗研究会で、緊張気味の報告発表をした後、佐野先生は、20世紀中国民間伝説研究には文学性と政治性の特徴を持つとの高見を述べ、中国の伝説研究をしっかりと発展させるようにと励ましてくださいました。

今回、研究派遣の機会をくださった神奈川大学非文字資料研究センターに深く感謝します。心を尽くして指導してくださった先生方、熱心に通訳してくださった程亮さん、生活にも勉強にも行き届いた世話をしてくださった成田さんに、心を込めて感謝の意を表したいと思いません。どうもありがとうございました。



愛知大学設立趣意書と自由受難鐘、自由・平和を求める願いと努力を表す

研究の発展につながった素晴らしい体験



マリアンナ・ザネッタ
(フランス国立高等研究院)

神奈川大学との出会いは大変な幸いであった。2017年春にフランスから短期学術交流プログラムに志願し、幸運にも2017年10月1日～19日の3週間にわたり招聘研究員として同大学の非文字資料研究センターに受け入れられた。受け入れ決定の直後に同センターの事務職員から連絡があり、到着前のあらゆる事務手続きについて説明を受けた。この点を強調するのは、こうした初期

のやり取りは細心の注意を要することが多く、適切な処理が重要だと思うからだ。というわけで職員による支援はとても役立ち、手続きを完了するには不可欠であった。

私の研究テーマは東北地方の女性シャーマンの文化人類学的研究であり、その特質上、スケジュールと研究計画の作成においても大きな支援を受けた。東北地方に出張し、博士論文後数年のブランクを経たフィールドワー



佐野賢治先生と記念撮影

クの現時点での状況を見極めるために、自由に行動できる時間を有効に活用することができたのだ。研究上の必要性を考慮した結果、滞在期間を神奈川大学での調査と、青森県、具体的には弘前市、青森市、野辺地町での現地調査に分けることにした。

日本到着にあたり事務職員は私のためにアパートを用意してくれ、また私が周辺地域になじめるよう近隣を案内してくれた。実際、神奈川大学キャンパスはかなり広く、最初の数日は一人で動き回るのは容易ではない。特に色々な研究施設を見学し、各所に所蔵された異なる資料を把握できたのは非常に有益であった。また、こうした数日間に指導教授をはじめとする様々な教授に紹介していただき、私の研究に関して意見交換し、文献調査とフィールドワークそれぞれをさらに深めていく方法について助言をいただいたのはとても重要であった。加えて、こうした初めの打ち合わせや顔合わせは、東北地方、特に青森市の研究者や専門家との幅広いネットワークを広げるきっかけとなったという意味でも不可欠であった。このおかげで、東北地方の女性シャーマンの現況についてより深く考察し、今日この分野に関わる人々のつながりを確認することができた。

実際の計画が具体化したところで、プログラム初めの10日間は横浜での調査に取りかかった。とりわけ、神奈川大学図書館は作業を始めるにあたり最も有意義な情報源の一つであった。東北地方（特に青森県）に特化した地方史や本など非常に重要な資料を利用することができ、様々な関心のある事象の発展の経緯や主だった特性についても深く分析することができた。さらに、青森県のイタコやシャーマンに関するドキュメンタリーや記録



昆政明先生との面談

といった貴重な視聴覚資料の数々を見ることができた。言うまでもなくこれらの資料が重要なのは、こうした習俗の過去の状況（約15～20年前）と現在の発展についての確に対比することを可能にするからである。

大学構内で研究した前半に続き、現況を調査するために東北地方に出張した。ここでも指導教授や職員の支援があったおかげで、特に青森市において（これまで入手できなかった）具体的な資料を見ることができた。同地では青森県立郷土館の研究者と面談し、同館で展示されている非文字文化資料の一部を入念に分析することができた。さらに県庁では、非常に貴重な視聴覚資料に触れる興味深い面談の場を持つことができた。中でも過去20年にわたる、重要な巫儀を行っている最中のイタコやシャーマンの古いテープ録画を視聴できたのは有意義であった。また、県内の様々な地域での同様の習俗を撮った貴重な写真も見ることができた。

東北地方での現地調査を終えて横浜のキャンパスに戻り、プログラム最終の数日を収集したデータの分析に費やした。

神奈川大学での滞在は、これまでで最も快適で研究上意義の深い体験の一つとなった。教員と事務スタッフの



弘前の水子地蔵



どちらも大きな助けになり、配慮に満ちていた。同大学で見つけることができた資料は私の研究に大いに役立ち、

また柔軟性のあるプログラムのおかげで東北地方の現状を幅広く深く分析することができた。

社会変遷の視点から二宮尊徳の祭祀を考察する

梁 珊珊
(華東師範大学)



2017年10月に私は訪問研究員として神奈川大学を訪れ、快適で楽しい学習と生活の時を過ごした。

10月11日夕方、私は横浜に到着した。チューターの兪鳴奇さんが迎えに来てくれた。神奈川大学に到着後、成田紅音さんがアパートを案内してくれた。その日の夜に、非文字資料研究センターの主任のお誘いで日本の居酒屋に行き、日本人の生活の一端を実際に体験した。

その後の数日間、成田さんは非文字資料研究センターの研究室と図書館、資料室などの学習のための場所を案内してくれた。そのおかげで、私は神奈川大学に少しずつ慣れてきた。10月13日に、私の日本における指導教員である小熊誠先生と会い、相談した後、私の今回の日本における調査内容は「二宮尊徳の変化について」に決定した。

10月15日に私は兪鳴奇さんと一緒に小田原市二宮尊徳記念館で調査を行った。その日は、小田原市民が記念館で集まって年一回の二宮尊徳祭を行う日であった。午前中にはまず尊徳記念館の先生の案内で記念館を見学した。記念館の展示の中には、二宮尊徳の勤勉克己な生



尊徳記念館の先生が解説している

い立ちや経歴が解説してあった。また、二宮尊徳が使った生活用具などが展示されていた。さらに、二宮尊徳に関する動画や模型などを通して、二宮尊徳の人生とその影響などを紹介していた。

その後、私たちは記念館のロビーで報徳太鼓の演奏を見学した。あいにくちょうど台風が



尊徳生家の茅葺の屋根

やってきて小田原はその日かなり雨が降っていたため、予定されていた街中での活動は中止となってしまった。

午後は、尊徳祭に関連する文芸作品の上演の時間だった。記念館の1階には、多くの小田原市民がグループで琴の演奏を行った。同時に2階では、小田原市の民間故事を語る活動が行われていた。内容は二宮尊徳についてだけでなく、小田原市のあらゆる事柄に及んでいた。その後、小田原の女性たちによる地域色豊かな田植え歌の演唱が行われた。中国の状況を思い出してみると、中国にも民間の故事や歌は多数存在するが、中高年の人々はたいてい恥ずかしがって公衆舞台の上で自分の才



地元の人が民話を語っている